

第3回「農林水産研究基本計画を踏まえた今後の国際研究行政のあり方」検討会 議事要旨

1 開催日時 平成 28 年 3 月 24 日(木)

2 開催場所 農林水産技術会議事務局会議室

3 出席委員 江原宏、岡村英喜、土居邦弘、中山一郎、平田泰雅、八木一行(敬称略)

4 議事

(1) 国際研究行政のあり方検討に資するため、委員から以下のプレゼンテーションが行われた。

- ・農業環境研究における国際連携について
- ・REDD+(プラス)を巡る情勢について
- ・(国研)水産総合研究センターにおける国際研究について

(2) 国際研究行政のあり方の打ち出し(具体案等)について委員からの主な意見

1) 国際研究行政のあり方の打ち出し(出口)概要版(案)について

- ・オープンイノベーションの取組状況で、国際的な活動に関する知の集積が含まれていないのであれば、具体的取組の中に国際版の知の集積を作ったらいかがか。その際は既存のプラットフォームで対応可能か。また、何らかの行政的措置を提言しないといけないと思うが、何もかもオープンで良いのか。進めるために出していかなければならない部分と秘匿しなければいけない部分があるので、国の戦略にどのように乗っかっていくべきか。
- ・非常に重要な情報も含めたリソースを共有化できるところが必要で、定期会合は大事だが、問題や情報は必ずしも定期的に発生しないので、もっとオープンな場でそれを共有出来ると良い。気候変動 COP や TICAD 等の大型国際会議の事前・事後に於いて、何をもち寄れるのか、又は、どうフォローするかについて適宜話せる機会が有れば良い。民間や大学を含め、適宜情報発信して分析出来る「場」が必要。人が集まらなくても発信出来る「場」が出来ると美しいと思う。
- ・オープンイノベーションの定義について、今、議論しているのは公的機関の話であるが、オープンイノベーションを生業とする企業があり、時間短縮できることがメリット。官のプラットフォームはスピード感が遅いので、早くすべき。
- ・それぞれの分野では国内外のネットワークがあり、1つ1つの機関では持っているが、不足しているのは行政と国研、国研同士、国研と大学など、それぞれのネットワーク同士を繋ぐ仕組みが欠けている。オープンイノベーションにおいては、ネットワークを繋ぐプラットフォームを整備するのが大事。しかしネットワークが何から何まで大事であるとする巨大なプラットフォームが必要となってしまうため、手始めに「攻めの農林水産業」と「地球規模課題」について、その情報の共有化・連携をするプラットフォームを作れば良いのでは。
- ・プラットフォームを作るのは手段であり、「攻めの農林水産業」や「地球規模課題」への具体的取組が目的だと思う。それらを実現する上での研究開発の中での強みをしっかりと見定めなければならない。しかし、今は強くない領域でも、10年後に必要となってくるところは、「キャッチアップする時間をお金で買うためのオープンイノベーション」というような捉え方をすると良いと思う。

2) 共通的課題について

- ・配布資料に記述されているのは、我が国だけがWinの内容と見受ける。相手にとってのWinは何でどうすべきか考えなければならない。
- ・研究の上でのWinとは、産業化まで行かずとも論文の共著もあるのではないか。その先の産業はまさに国の行政施策との関係になってくると思うが、研究でのWin-Winと国としてのWin-Winというのは、リンクはしているのだろうけど、どのように考えるべきか。
- ・世界に誇れる強みのある農林水産物を開発するための環境整備について、開発することが目的ではない。開発してどのような経済価値を生み出したいということで良いか。日本が輸出して儲かるための開発か(事務局:然り)。強みある農産物とは、どのようにして選んでいくのか。そのステップの前に、セレクションのステップが入らないといけない。打ち手として、包材の開発や物流の改善など経済価値を得るまでに必要になってくると思うので、バリューチェーンで物事を捉えることが必要。
- ・国際共同研究の推進として、外国からもっといいものを持ってきたい場合に行うが、対象が何かということは極めて大事。

3) 攻めの農林水産業の実現に向けた知の共有・融合化及び地球規模課題への対応や開発途上地域の食料安定生産等の具体的取組について

- ・ウンカに関する中国への考察団派遣というのは、これだけ単独で立つにはマイナーなので、プレイヤーを意識し一歩踏み込んで書かないといけない。
- ・選択と集中ということであれば、誰が対応するか見えてきても良い。例えば、ウンカについて言えば、ベトナムとの協力の成果をカンボジアやラオスに普及させていくことも良いアイデア。食文化を一つの調査として、消費が増えている作物、インフラが整っていない部分等、作物、品種の両方をにらんだ調査が行われると良い。
- ・テーマや分野を選択と集中していくなかで、地域の実情もあろうかと思う。例えば、森林減少で大きな問題を抱えているメコン地域とか。
- ・今の食文化・現地ニーズ調査はすごく重要。ハラルも入るだろうし、「市場を作り出す」ような調査も書けると良いと思う。
- ・日本の育種技術を使って今まで想定していなかったものをというのも非常に新しい切り口かもしれない。

以上.